

今回の特集テーマは

「人生のターニングポイント」。

今の自分を形づくるのは、あの出来事があったから、

今のポジションは、あのときの決断があったから、

今の仕事にたどり着いたのは、あの人に会ったから、

そのときにはわからなかった、

大きな出来事と選択が誰にもあります。

人生のターニングポイントについて、

先生方に振り返ってもらいました。

挫折は成長の糧。
失敗を重ねるたびに人は強くなり、
諦めずに挑戦し続けることで、
新たな道が切り拓かれる。

学部長

吉田秀典

よしだひでのり
1995年東京大学大学院工学系研究科
土木工学専攻博士課程修了。
2005年香川大学工学部教授、
2015年10月～2025年9月 香川大学副学長。
2025年10月～香川大学創造工学部長。
スコッチ・ウイスキーのシングルモルトを愛する。

知的好奇心の芽生え、将来の夢は研究者

私が子どもの頃は、今のように読みたい本を気軽に買える時代ではありませんでした。本を買ってもらえるのは誕生日やクリスマスくらい。友人たちも同じような環境だったと思います。そのため、私は自然と公立図書館へ通うようになり、借りられる本を次々と読んでいました。今でも、大学時代の教科書を保管していますが、その価格を見ると、40年前にもかかわらず現在とほとんど変わらず(普通のアイスクリームは50円位でした)、当時の書籍は決して安いものではなかったことが分かります。

夢中になって読んだのは、江戸川乱歩の『少年

探偵団』シリーズと、偉人たちの伝記でした。これら二つのジャンルは私の知的好奇心を大いに刺激。なかでも、日本人として初めてノーベル物理学賞を受賞された湯川秀樹博士の伝記には強い感銘を受け、「いつか自分もノーベル賞を取りたい」と両親に宣言したことを今でも覚えています。もちろん、両親はまるで相手にしていなかったです(笑)。私の高らかな宣言とは裏腹に、親から私の知的好奇心への支援はなく、私の図書館通いは続きました。こうした経験を通して、「将来は研究者になりたい」という思いを自然と抱くようになりました。



知的好奇心と探究心が培われ、その後の原動力に

湯川秀樹博士をはじめとする科学者の伝記を読むうちに、科学全般に興味を持つようになり、とりわけ数学の面白さに惹かれていきました。中学校に入学した頃には、矢野健太郎博士の『数学へのすすめ』をよく読んでいました。なかでも印象に残っているのが、半径の異なる外輪と内輪をもつ車輪を転がす問題です。外輪と内輪は一体となって同じ回数だけ回転し、中心も同じ距離を移動します。それにもかかわらず、半径の異なる二つの円が、あたかも同じ距離を転がったように見えるのです(アリストテレスの車輪)。実際には、地面に接して滑らずに転がっているのは外輪であり、内輪には円弧の長さと移動距離との差に相当する「滑り」が生じています。身近な車輪の動きから、このような一見矛盾した問いが生まれることに、数学の不思議さと面白さを感じました。

矢野健太郎博士の著書は、入門書から専門書、啓蒙書まで幅広く読みました。『解法のテクニック』も愛読書の一つで、数学は単に計算するためのものではなく、身近な現象を論理的に捉え、その背後にある仕組みを考える学問なのだと感じるようになりました。

学校の数学の授業ももちろん大切でしたが、それ以上に私の興味を引いたのは、矢野健太郎博士の著書に書かれている、学校では扱わない数学の話題でした。授業で習う内容を理解するだけでは物足りず、放課後や休日には本を読み進めながら、「なぜそうなるのか」「他にも解き方はないのか」と考えることに夢中になっていました。また、本に掲載されている問題や、自分で見つけた数学の課題に挑戦し、試行錯誤の末に自分の力で理解できたり、解法にたどり着いたりしたとき

師との出会いで、育まれ、人は成長する

高校受験を経て進学した高校には、当然ですが、自分と同程度の学力をもつ生徒が集まっていました。そのため、中学校までとは学習環境が大きく変わり、加えて、数学の試験も単なる知識の確認ではなく、思考力や応用力を問う問題が多く出題されました。私自身、現在大学で試験問題を作成する際には、受験者の理解度が適切に評価できるよう問題の難易度を調整していますが、高校でも同様の工夫がなされていたのだと思います。

入学後最初の数学の試験では30～40点台という結果でした。中学校では数学が好きで、自分なりによく勉強してきたつもりでしたので、この結果には大きな衝撃を受けました。同時に、「数学が好き」ということと、「数学の基礎力や応用力が十分に身に付いている」ということは必ずしも同じではないことを初めて実感しました。

その後もしくはらくは思うような成績を収めることができませんでした。しかし、この経験を通して、自分の理解を過信せず、基礎から着実に積み重ね

ることの大切さを学びました。今振り返れば、この時期は数学への興味だけで前に進んできた自分が、初めて自分自身の実力と正面から向き合った時期だったように思います。

高校時代は柔道部に所属し、朝練習と放課後の練習に打ち込む毎日でした。体力的にも厳しい生活でしたが、高校2年生の夏頃、「このままではいけない」と考え、数学だけは毎日継続して勉強することを自分に課しました。その頃、数学担当で担任でもあった先生が、私の様子をよく見てくださっていました。成績だけではなく、毎日少しずつ努力を続けている姿を認め、折に触れて声を掛け、励ましてくださいました。先生は決して答えを教えるのではなく、「自分で考え、自分で理解できるようになるまで待つ」という姿勢で接してくださいました。そのような日々の積み重ねの中で、少しずつ数学への理解も深まり、自信も取り戻していきました。今振り返ると、自分の好奇心だけで学び続けることには限

の喜びは格別でした。当時は、そのような体験を重ねるたびに、自分の考えが数学の世界で少しずつ通用するようになった気がして、大きな充実感を覚えていました。

今振り返れば、それは数学が得意だったというよりも、「分からないことを自分で考え、理解すること」そのものが楽しかったのだと思います。この頃に培われた知的好奇心と探究心は、その後研究者を志す上での大きな原動力になりました。



界がありました。自分では気付かない課題や進むべき方向を示し、努力を信じて見守ってくださる先生がおられたからこそ、一歩ずつ前へ進むことができたのだと思います。

卒業後も毎年欠かさず恩師へ年賀状を送り続けました。先生からは「頑張っているか」「しっかりやっているか」と、いつも変わらぬ言葉をいただいていた。やがて先生が文字を読むことが難しくなられた際には、ご家族から「年賀状はご遠慮いただきたい」とご連絡をいただき、その数年後に先生はご逝去されました。先生は長年にわたり多くの卒業生を送り出されましたが、追悼文の執筆者として私をご指名いただきました。その知らせを受けたとき、先生とのご縁の深さをあらためて感じるとともに、人は一人で成長するのではなく、人生の節目で導いてくださる「師」との出会いによって育てられていくものなのだと、強く実感しました。

理学志望を取り下げ、橋梁への関心を起点に土木工学科へ進路変更した大学受験は次号4号で。